

主 題：あなたへの祝福を忘れない4 ——死に対する勝利——
聖書箇所：ローマ人への手紙 2章11節

“光の高地にたむろなせる 主の兵士（つわもの）たち 身を備えよ
谷間に隠れて隙をうかがう 悪魔の手下の数は多し
信仰は勝利 信仰は勝利 信仰もて 世と悪魔に勝たん”

恐らく皆さんもよくご存じの聖歌514番です。この歌詞を記したのは、イギリスからアメリカに移り住んだ移民の子ジョン・イエイツ、そしてこの詞にメロディをつけたのは、あのムーディという大伝道者の伝道集会の音楽の責任者イラ・サンキーという人物です。今、特に見ていただきたいのは2番です。

“御旗は愛なり いざ掲げよ 剣は聖書のみことばなり
昔の聖徒にならい進め 彼らは墓にも手を引かせぬ”

と、日本語で大変すばらしい訳をつけていますが、実際このジョン・イエイツという人物が伝えたかったことはこういうことです。「勝利を叫びながら歩んだ、天にいる聖徒たちにならって私たちは歩む。信仰により彼らは旋風のように全地を吹き抜けた 彼らが死に勝利した信仰は今も我々の輝く盾である」と。

まさに前回私たちが学んだように、信仰は勝利であると、私たちはこの世に打ち勝ったのだとヨハネが教えてくれました。この世は私たちをかつての主イエス・キリストを信じる前の生活へと誘惑します。神に背き、自分の思いどおりに生きようと誘惑するのです。しかし、ヨハネが我々に告げたことは、もうあなたはこの世に勝利したのだと、我々は新しい生き方をなすことができるのだと、この地上にあって私たちはこの救いのすばらしさを、主イエス・キリストのすばらしさを伝える者としての新しい人生を歩み出したのだということでした。ですから、あなたに必要なこと、私に必要なことは、もうあなたも私も勝利者だということを知ることです。勝利者になるのではないのです！勝利者になったのです！私たちはイエス・キリストを信じた時に勝利者とされました。ということは勝利者として生きることができると聖書は私たちに教えます。確かに私たちはこの世に勝利したといえども、世の誘惑を受けて嫌と言うほど何度も何度も失敗を重ねてきました。

しかし、ヨハネが私たちに教えてくれたことは、キリスト者であるあなたはその中であっても勝利者として生きるということでした。でもそのためには我々はどのように歩むかを学ぶことが必要です。私たちが勝利者として生きていくためには、神が備えてくださった助けをいただきながら日々を過ごしていくことが必要です。この聖歌514番の折り返しの所、日本語では「信仰は勝利、信仰は勝利、信仰もて世と悪魔に勝たん」とあります。ここを直訳すると「信仰は勝利、信仰は勝利、世に勝利する輝かしい勝利」となります。それはもうあなたのものであり、私のものだ、だれかの話をしているのではなく、クリスチャンであるあなたの話です。

A. 「死に対する勝利」

きょう私たちは勝利者として生きることについて、特に死に対する勝利について一緒に学んでいきます。その後私たちは死に対する勝利者らしく生きることを少し具体的に見ていきます。どんなふうに生きることが死に勝利した者としてふさわしく生きることなのかです。なぜなら理論を学んでも実際にそのように生きなければ何の力にもなりません。ですからまず死に対する勝利について学び、つまり神様があなたにどんな祝福を下されたかを学び、それをいただいた者としてどう生きていくのかを一緒にみことばを通して学んでまいります。

まずきょうのテキストとして、皆さんに開けていただきたいのは、ローマ5：21です。「それは、罪が死によって支配したように、恵みが、私たちの主イエス・キリストにより、義の賜物によって支配し、永遠のいのちを得させるためなのです。」とあります。お気づきになったと思いますが、「支配」ということばが2回繰り返されています。「罪が死によって支配した」、「義の賜物によって支配し」と。この「支配した」ということばは比喩的に「王として統治する」とか、「完全にコントロールする」という意味です。パウロは、かつては「罪」が完全に私たちをコントロールしていた、「罪」が王であるかのようにして私たちを統治していたと教えています。そして今私たちは救いにあずかり、今度は「恵み」が私たちを王として統治し、まさに「恵み」がすべてをコントロールしているのだと教えます。つまり我々は全く新しいものへと生まれ変わったと言うのです。パウロはこの箇所です。「罪」と「恵み」を、それぞれがもたらすものを対比しな

がら説明しています。一体「罪」が何をもたらすのか、「恵み」が一体何をもたらすのか、その対比をすることによって、その違いを明確にするのです。

1. 「罪の産物」：死

まず「罪」の産物を見ていただきたいのは、この箇所には「罪が死によって」とあるように、「罪」がもたらすもの、それは「死」であるとパウロは言っています。私たちは生まれながらに「罪」の支配下に置かれていたのです。私たちはある年齢に達した時から神に逆らうようになったのでありません。神に逆らうもの、神の命令に背くものとして、我々は皆例外なく生まれてきました。どんなに赤子がかわいくても、我々が聖書を通して教えられることは、その子の中にはもう「罪」の性質が宿っているということです。を持って生まれてきたということです。イエス様のおことばによれば、「罪」を犯すということは「罪」の奴隷であると。ヨハネ 8：34 に「まことに、まことに、あなたがたに告げます。罪を行なっている者はみな、罪の奴隷です。」とあります。我々はみんな例外なく、「罪の奴隷」として生まれてきています。「罪」が私たちに支配した状態で、「罪」が私たちの王であるかのようにして我々は生まれてきています。その「罪」が私たちに何を約束してくれたのか、「罪」が我々をどこに導いて行こうとしているのか——。それは「死」であり、言い方を変えれば永遠の地獄、永遠のさばきだと教えています。

ローマ 6：23 で「罪から来る報酬は死です。」と、「罪」を犯せば必ずその人には当然の報いとして「死」が訪れる。これは肉体的な「死」だけではありません。霊的な「死」、つまり神から永遠に引き離された状態であると教えていることは皆さんご存じです。ヨハネ 3：36 でヨハネは「御子を信じる者は永遠のいのちを持つが、御子に聞き従わない者は、いのちを見ることなく、神の怒りがその上にとどまる。」と教えます。質問ですが、神の怒りがその人の上にどれくらいの期間とどまると思いますか？永遠でしょう？なぜなら「永遠のいのち」と対比して書かれてあるからです。信じる者には「永遠のいのち」が与えられるけれども、そうでない者には永遠の間「神の怒り」が与えられると。終わることのない「神の怒り」です。少し進んで 5：24 を見ると、「まことに、まことに、あなたがたに告げます。わたしのことばを聞いて、わたしを遣わした方を信じる者は、永遠のいのちを持ち、さばきに会うことなく、死からいのちに移っているのです。」とあります。わたしを「信じる者は永遠のいのちを持つ」けれども、信じない者はさばきに遭うのです。主イエス・キリストの救いを受け入れた者には永遠のいのちが与えられるけれども、その救いを拒んだ者たちには永遠のさばきと与えられる。この文章から私たちにそのことを伝えようとしていることは明らかです。どちらも永遠の話です。ですから人が死んだらどうなるかということ、ある人たちは神のもとに上がります。ある人は今ハデスに行きます。そしてハデスに行った人々はその後最後の審判の時に全員よみがえって来て神の前でさばきを受け、そして地獄です。どちらかに行くのです。

きょうのテキストに戻ると、「罪」が私たちに約束したことは「死」です。我々はみんな例外なく生まれながらに永遠の地獄に向かっている者たちでした。そしてみんな地獄に至って当然の者たちです。我々の創造主に対して私たちがやってきたこと、我々が考えてきたこと、私たちが口にしてきたこと、そのすべてを見た時に私たちが本当に地獄にふさわしい存在です。一体私たちのうちのだれが天国にふさわしいと言えるのでしょうか。そんな人はどこにもいない。なぜなら創造主なる神にことごとく背いて自分勝手な道を生きてきたのですから。「罪」が約束したことは永遠のさばきであり、地獄であり、「死」です。

2. 「恵みの産物」：永遠のいのち

次に、恵みがもたらすのは一体何かというと、それは「永遠のいのち」です。実はこの 21 節のみことばはまずある接続詞で始まっています。これがこの神様の「恵み」の究極的な目的を表しているのです。この神の「恵み」は一体何を目的としているのか、なぜ神は「恵み」を我々罪人にお与えになったのか、その目的です。なぜ神はあなたに恵みを与えてくれたのかです。それはあなたに「永遠のいのち」を与えるためです。あなたが「永遠のいのち」を得ること、これが神があなたに「恵み」を与えてくださった目的だと言うのです。

この 21 節のみことばは、まさにパウロが救いというものの歴史を要約して記しているのです。アダムの罪によってすべての人類、すべての人間が「罪」の支配下に置かれ、その結果である「死」の支配下に置かれていた。我々がどんなに努力をしようと、この「罪」の束縛から自由となり、「罪」を犯さない完全な人になることは不可能でした。我々はどんなに心を入れ替えて頑張っても自分で自分を変えることはできない。またこの「死」という私たちにどうすることもできない敵に対しては、もう白旗を上げるしかなく、ただ黙ってその日が来るのを待つしかなかった。そしてその「死」が訪れたら、その後私たちが神のさばきを受けるためにハデスに下ったのです。この運命を我々は変えることができなかった。しかし、そこに希望が訪れたのです。主イエス・キリストがこの世に来てくださり、主イエス・キリストがあなたのすべての「罪」を負って身代わりとなって死んでくださり、そしてその死より肉体を持ってよみがえることによって我々が絶対に打ち破ることのできなかったこの敵に対する勝利を主イエス・キリストご自身が勝ち取ってくださった。だからイエスを信じる者にこの勝利が与えられるのです。この勝利を

我々はいただくことが可能となったのです。

ですから、確かに私たちは「罪」に対しても無力でした。「罪」の束縛から逃れることができなかつた。その「罪」がもたらす結果である永遠の地獄から我々はどうしても逃れることができなかつた。しかし、感謝なことにイエス・キリストによって私たちはそこから救い出されたのです。だからイエス・キリストの十字架と復活によって敢然とイエスは「死」に対して勝利された。「罪」に対して勝利された。その勝利を私たちは今キリスト者として味わうことが許されたのです。ヘブル人への手紙の著者は2：14で「そこで、子たちはみな血と肉とを持っているので、主もまた同じように、これらのものをお持ちになりました。」と言っています。イエス・キリストは私たちと同じように肉体をお持ちになった。そしてイエス様がなぜ人になったのか、その理由は「これは、その死によって、悪魔という、死の力を持つ者を滅ぼし、一生涯死の恐怖につながれて奴隷となっていた人々を解放して下さるため」だったと伝えるのです。イエス・キリストの「死」によって、悪魔の力を、「死の力」を、また「死の恐怖につながれて」どうすることもできなかつた「罪」の奴隷である私たちをそこから解放して下さった。私たちが例えばきょう地上での生活を終えたとしても、我々は神とともに永遠を過ごすわけでしょうか？我々クリスチャンには「永遠のいのち」が与えられているわけですよね？「永遠のいのち」をいただいている、それはこの方が永遠に生きておられる神だからです。神様は、神様から離れて「罪」の中で、そのさばきの永遠を過ごすような存在である私たちをそこから救い出されて、我々を造り、我々を愛し、罪の赦しを与えて下さったまことの神と永遠を過ごす祝福の中に招いて下さった。そしてあなたも私も永遠に生きておられる神と、その神の祝福の中をともに過ごすことができる。だから私たちにとって、その時が待ち遠しいのです。

我々はイエス様の御顔を拝するのです。十字架で死んでくださったそのお方の御顔を拝するのです。我々はイエス様の御顔を見てはいません。でもその日が来るのです。数々の賛美歌が歌ったように我々はその手の釘の跡を見てこの方の前に賛美を捧げる。我々はその手の釘の跡を見る時に、この犠牲は私のためだと。こうしてこの方を心から喜び、感謝し、この方をあがめるのです。こうしてこの方とともに永遠を過ごすのです。こんなすばらしい祝福を神はあなたや私に下さったのです。ただその「罪」の束縛から解放されただけではない、この生きた神との親しい交わりを与えてくださり、この交わりは終わることがない。今もそしてとこしえにこの方とともに過ごすことができる。

◎ 恵み 20節

今開けておられるローマ5：20を見てください。「律法がはいって来たのは、違反が増し加わるためです。しかし、罪の増し加わるころには、恵みも満ちあふれました。」とあります。この「満ちあふれ」ということばの意味は「与えられた量よりもより多く、より豊かに」です。また「あり余るほどに与えられる」ということです。つまりこの箇所が私たちに教えることは、「度を越えた」とか「最大の度合い」というのを一番に強調しているのです。つまりパウロはあなたの「罪」よりもはるかに多い恵みを神様は下さったと言うのです。私たちは至るところ、その「罪」によって汚れていることを我々は知っています。私たちはこうして神を礼拝していても神がお喜びにならない思いを抱いてしまったり、そういう思いからなかなか離れることができなかつた。ありとあらゆる時に私たちは自分自身の罪深さに気づかされます。でもみことばが私たちに教えてくれるのは、その我々の「罪」よりもより多くの祝福を、この恵みを神は私たちに与えて下さった。だから今こうして我々は神の前に立つことが許され、こうして親しい交わりにあずかることができているのです。あなたの「罪」よりも勝る、余りあるほどの恵みを神は一方向的にあなたに与えて下さった。すばらしい祝福をいただいています。神はあなたのすべての「罪」を知った上でそれに勝る恵みを与えて下さる。神に逆らい続けてきた私たちに対して神は高価でたっとい犠牲を、そして完全な救いを備えて下さった。しかもこのような大きな犠牲を神はみずから進んで捧げて下さった。

私たちは思い出さなければいけないのです。イエスがお受けになった辱めがどんなに苦しいものだったか。イエス様があの十字架の上で、それにかかる前、鞭打たれて苦しまれたその苦しみがどんなに苦しいものであり、どんなに痛いものであったのか——。私たちが経験したことのない。肉が裂け血を流し、そしていのちを捨てた。あなたを造った神が、この神に逆らい続けているあなたに対して払って下さった犠牲、神ご自身のいのちをもってあなたをその罪から救い出そうとして下さった。私たちは救われたのです。我々はこの救いにあずかったのです。神が「罪」を赦して下さった。生まれ変わらせて下さった。すべて一方向的な神の恵みによって私たちはこの祝福にあずかったのです。みことばが私たちにあなたの罪深さについて、私の罪深さについて繰り返し示し続けてくれます。みことばを通して我々は自分の罪深さに気づかされます。神様はなぜそんなことをなさるのかということ、自分の本当の罪深さをわかった者だけが神の救いの恵みの偉大さを正しく理解し、そしてそれにふさわしい感謝を捧げるからです。どれだけの祝福をどれだけの犠牲を払って下さったのか、どんな愛でもって愛されているの

わかっている人はそれに何とかこたえようとします。神がこれほどの犠牲を払ってくださっているから、私たちが何もしないとしたら何か問題があると思いませんか？私たちの信仰生活というのは何度も学んできているように、この神の恵みに対して私たちが応答しているのです。感謝します、神様。神様ありがとうございます。神様、私はあなたを愛しています。あなたのような愛であなたを愛することができないけれども、だから私たちは喜んで主に従っていこうとするし、自分のすべてを捨ててこの方に従っていこうするのは、この方がすべてを捨ててくださったからです。だから私たちも喜んでこの方のためにすべてを捨てて、パウロが教えるように我々のすべてのものも我々のものではない。神ご自身が代価を払って買い取ってくださったから神の栄光を現せと教えられているように、当然な生き方なのです。そうしなければならないのではないのです。神の恵みに感謝している人はそう生きようとするのです。

今我々が考えなければいけないのは、ではあなたはそんなふうにいるかどうかです。そんな思いがあなたを押し出しているかどうかです。あなたのなしている奉仕はみんな神への感謝の表れなのかどうかです。それともやらなければいけないからやっているのかです。だれを喜ばせようとしているのかです。神なのかそれとも人に褒めてもらいたいなのかです。人の目を気にしている人生は空しいものであり、そんな価値のない人生は送る必要もないのです。私たちは、この神の恵みによって勝利をいただいたのです。かつて私たちを捕らえていた我々がどうすることもできなかったこの「死」に対して、「罪」に対して神は勝利を下された。それが救いだ。と。再び聞きますが、あなたはこの救いをいただいていますか？きょう、地上での生活が終わっても、確実にイエスのもとに上がると確信を持って言えますか？それはあなたが神に答えなければいけない。もしあなたがイエスとお答えになるのだったら、私の生活は神に対して心からの感謝を表す生き方なのかどうかです。

B. 「死に対する勝利者らしく生きる」

私たちは「死」から救い出された。では今度は「死」に対する勝利者らしく生きる、具体的な歩みを見ていきましょう。「死」に対する勝利者らしく生きるというと、ある人はこう言うかもしれません。「死」を恐れないで生きることです。もちろん我々クリスチャンは「死」に対する恐れがありません。なぜかという、死んだ後どこに行くかわかっているからです。どこに行くかわからなかったら不安で仕方がない。でもたとえきょう地上での生活が終わってもどこに行くか決まっているのです。イエス・キリストを信じた者たちはキリストのもとに上がるのです。そこに主は場所を備えてくださっている。だから当然私たちは「死」に対する恐れがない。逆に我々がこの地上での最後の呼吸をした時、その瞬間に私たちは神のもとに上がっています。我々信仰者はその日を待望しているはず。先ほどから見てるように、イエス様にお会いするのですから、その日を待ち焦がれているはず。でも確かにこの世でイエス様を知らない人たちの中にも、私は「死」について恐れを持っていませんと言う人がいることも事実です。私は死など全然恐れていないとお聞きになったことあると思います。ひょっとしたら彼らも天国に行けるからと、私たちと全く同じことを言うかも知れない。でも大切なことは一体何を根拠にそう信じるかです。何でも言うことは自由かもしれない。でも問題は何を根拠にそう言えるかです。

1. キリスト者の根拠

私たちは罪赦された。ゆえに私たちはきょう「死」を迎えてもイエス様のもとに上がります。確信を持ってそう言えます。ここには根拠があります。どんな根拠かという、少なくとも二つのことを見ることが出来ます。

1) 主イエスの復活の事実

それはイエス・キリストの復活という根拠です。イエス様があの死から敢然とよみがえってこられた。このことは私たちに、我々も「死」を迎えるけれども、人間はそれで終わってしまうのではなくて、必ず例外なくすべての人がよみがえるということを教えてくれます。Iコリント15：12からパウロはそのことを教えています。13節「死者の復活がないのなら、キリストも復活されなかったでしょう。」、つまりキリストが復活されたという事実は、死者はみんなよみがえるということを教えています。

2) さばきの現実

ではよみがえって何があるかという、さばきがあります。伝道者の書12：14でソロモンはこう言います。「神は、善であれ悪であれ、すべての隠れたことについて、すべてのわざをさばかれるからだ。」と。だれも見えていないから、だれも知らないからと思っても、残念ながらそれは間違っています。すべてのことを知っている方がおられるのです。あなたの創造主なる神です。この方はあなたのすべてのこと、あなたの隠れたこと、すべてのことをごらんになっておられる。神はそのすべてを知った上でさばきを与えるとみことばが言います。神様のすばらしい救いがあるにもかかわらず、その救いを受け入れようともしないで、自分の思いどおりに生きている人たちには必ずさばきがあると言います。パウロはIIテサロニケ2：12で「真理を信じないで、悪を喜んでいたすべての者が、さばかれるためです。」と言っています。「真理を信じないで」この救いを信じることなく、自分の好き放題なこと、自分でやりたいことをして歩

んでいた者たちはさばかれると。

人は必ずよみがえるし、そしてよみがえったひとりひとりが神の前でさばきを受ける。だからその「罪」のさばきから救われることが必要だということです。「死」を恐れないと言う人がいます。天国に行けると言っている人はいます。でもその根拠は主イエス・キリストによって罪が赦されているかどうかです。罪が赦されていなければ必ずその罪はさばきを受けるのです。私たちがさばきを恐れていないのはどうしてか——。我々は死んでよみがえった後、神のさばきに遭わないのはどうしてか——。罪が赦されたからです。赦された者が何をさばかれます？罪のさばきは終わったのです、解決済みなのです。ですから確かに主を恐れぬ人がいて、天国に行けると思い込んでいる人はたくさんいるでしょう。でも彼らの罪が赦されていない以上、たとえそれをどんなに強く信じていたとしても、彼らには彼らが思っている「永遠のいのち」は与えられません。彼らに与えられるのは、彼らに最もふさわしい永遠のさばきです。私たちはあの罪に対して、死に対して勝利されたイエス様の勝利をいただいた者たちです。自分が努力をして勝利を得たのではない。勝利者なるイエス・キリストがその勝利をあなたに与えてくださったのです。だから私たちは確信を持って、私はきょう死んでもこのイエス・キリストのもとに上がり、このイエス・キリストとともに永遠を過ごすのですと言えるのです。

2. 「天国民としてのふさわしい生き方」

さて、天国民として我々は新しく生まれ変わったと。「罪」から解放されて永遠の死からも解放された。我々はこの地上にあってどんなふうに勝利者として生きていくのか——。今から二つのことを見ていきます。

1) 与えられた日に対して忠実である

まず一つ目は与えられた日を忠実に生きるということです。つまり与えられた日を、与えられた時間をむだにしないということです。ヤコブ4：13－14を開いてください。「聞きなさい。『きょうか、あす、これこれの町に行き、そこに一年いて、商売をして、もうけよう。』と言う人たち。あなたがたには、あすのことはわからないのです。あなたがたのいのちは、いったいどのようなものですか。あなたがたは、しばらくの間現われて、それから消えてしまう霧にすぎません。」とあります。注意して見てください。ここにあるひとりの人物がいるのですが、「きょうか、あす、これこれの町に行き、そこに一年いて、商売をして、もうけよう。」、つまりこの人物は自分の人生の計画を立てています。しかもその計画どおりにすべてがなるのだと信じています。この人物の大きな問題は、もうけることが最大の関心事です。この人は永遠のことではなくて、この世のことだけに関心を払っています。神のみこころではなくて、自分の計画に沿ってすべてのことを進めようとしています。神の恵みではなくて、自分の力でそれらを達成できると信じています。自分自身で綿密な計画を立て、そしてそこに自信を持っています。自分でできると思っているからです。「自分を信じれば何でもできる」などというスローガンがありますよね。神の助けが必要であるとか、明日のことはわからないのだという考えはみじんだりとも見ることはできません。ここにあるように、「これこれの町に行」ってと、彼はそこに行けることを確信しています。一年過ぎると、そこにあつて自分の計画がすべて無事達成できると確信しています。「商売」と書いてあります。何をするかは決まっています。しかもここに見ることができるのは、自信にあふれた自分の計画どおりになる、そのような人の姿を見ることができず。

そこでヤコブはこの人物に対して警告を与えています。ヤコブ4：14－15でいのちとは一体どのようなものかを教えています。それは「霧」のようなもので大変はかないものだと言います。ヨブがヨブ記7：7で言います。「思い出してください。私のいのちはただの息であることを」、短いという話です。詩篇103：15でも「人の日は、草のよう。野の花のように咲く。」と、咲いたらまたしぼんでしまう、枯れてしまう、一瞬でしかない。ヤコブが我々に何を教えてくれているかということ、だれひとりとして明日のことがわからないというのです。なぜこの与えられた日を正しく忠実に生きないのか、なぜこの日を一生懸命主のために生きないのかと問うているのです。

もう1カ所ルカ12：35－40を開いてください。イエス様はこんなお話をされています。主人が婚礼に出席した時の話です。「腰に帯を締め、あかりをともしないでいなさい。主人が婚礼から帰って来て戸をたたいたら、すぐに戸をあけようと、その帰りを待ち受けている人たちのようでありなさい。帰って来た主人に、目をさましているところを見られるしもべたちは幸いです。まことに、あなたがたに告げます。主人のほうで帯を締め、そのしもべたちを食卓に着かせ、そばにいて給仕をしてくれます。主人が真夜中に帰っても、夜明けに帰っても、いつでもそのようなことを見られるなら、そのしもべたちは幸いです。このことを知っておきなさい。もしも家の主人が、どろぼうの来る時間を知っていたなら、おめおめと自分の家に押し入れはしなかつたでしょう。あなたがたも用心していなさい。人の子は、思いがけない時に来るのですから。』」と。ここでイエス様が教えようとしたことは、備えをしていなさいということです。主の再臨に対する備えの話です。最初に出てくるのは「腰に帯を」締めなさいということです。というのはこの当時の人たちは衣を身に着けていました。そ

してその衣が緩んだ状態では行動の妨げになります。どこかに出かけて何かするためには邪魔になるのです。ですから彼らは帯でしっかりとそれをくくりつけるわけです。そうすると動きがある程度自由になります。ですから、そういうこの当時の人々がよくわかる話をもって、今すぐにでも仕事ができるように備えていなさいと言うのです。

二つ目に「あかりをともし」なさいと書いてあります。主人が帰って来るのが夜であったとしても、いつ帰って来るかわからないから、そのための備えをしていなさいと言うのです。今のようにスイッチをつければ電気がつくわけではありません。夜帰って来るかもしれないから、その時のためにちゃんとあかりを準備していなさいと。

36-38節のところにはひとりのしもべの話が出てきています。「主人が婚礼から帰って来て戸をたたいたら、すぐに戸をあけようと、その帰りを待ち受けている人たちのよう」だと。「腰に帯を締め」ること、「あかりをともし」すこと、そして「帰りを待ち受けている人たちのよう」であれと。この「婚礼から帰って来」というのは、今の私たちの婚礼とは全く違います。今は何月何日何時から結婚式があります。それに続いてレセプションがあります。大体すべてが時間どおりに始まり時間どおりに終わるのです。当時の婚礼はそうではなく、行ってみてもまだ食事が準備できていなかったら始まりません。ゲストが集まって来なければ始まらないのです。だから決まった時間に始まるわけではなかった。いざ結婚式が始まったとしても、備えられた食事の量や来られるゲストによって時には一週間近く結婚式が行われることがあるのです。そうすると、結婚式に行った主人が一体何時に帰って来るかわからないという状況の中に彼らはいたのです。ですから彼らにとって、この例えはよくわかったのです。いつ帰って来るかわからないから、そのために備えをしていなさいと。37節に目を覚ましているしもべは「幸いです」と書いてあります。「主人のほうに帯を締め、そのしもべたちを食卓に着かせ、そばにいて給仕をしてくれます。」、つまり主人が喜び彼らを祝してくれるということです。

そして最後に四つ目の話として39節からどろぼうの話が出てきます。どろぼうが入って来るのは用心していなかったからだ。

こうしてイエス様はこのような四つのお話をういて主の再臨に対して備えをいなさいと教えます。あなたはその準備ができていますか？きょうイエス様が帰って来るかもしれないと言ったわけです。だとしたらこの日に我々は備えをしていることです。明日するつもりだったとか、1年先でするつもりだったではだめだと言うのです。きょうしていなさいと言うのです。ですからみことばが私たちに教えてくれているように、我々信仰者の生き方というのは明日のために生きているのではない、この日を大切に生きているのです。神が下さったこの日、神の前を正しく忠実に歩み続けていなさいと。与えられたその日をむだにしてはいけません。

2) 与えられた務めに対して忠実である

二つ目に与えられた務めに対して忠実であることです。ルカ12:42から見てください。「主は言われた。『では、主人から、その家のしもべたちを任されて、食事時には彼らに食べ物を与える忠実な思慮深い管理人とは、いったいだれでしょう。主人が帰って来たときに、そのようにしているのを見られるしもべは幸いです。わたしは真実をあなたがたに告げます。主人は彼に自分の全財産を任せるようになります。』」、この42-44節は忠実なよい管理人の話をしていきます。45節からは不忠実な人たちの話が出てきます。忠実な管理人というのはクリスチャンたちのことです。不忠実な人たちというのは救われていない者たちです。46節「そして、彼をきびしく罰して、不忠実な者どもと同じめに合わせるに違いありません。主人の心を知りながら、その思いどおりに用意もせず、働きもしなかったしもべは、ひどくむち打たれます。」、みことばを知ってはいるのです。でも受け入れていないのです。そういう人たちに対しては大変厳しいさばきがある。48節「しかし、知らずにいたために、むち打たれるようなことをしたしもべは、打たれても、少しで済みます。」、つまりその人たちに比べて神様の教えておられる真理をわずかしか知らなかった者たちはさばきは受けますが、そのさばきの程度が違うことはおわかりだと思います。未信者の中にこういった異なったさばきが存在するのです。みんなさばかれますが、知っていて拒んだ者と知らずに拒み続けた者たち、神様から異なったさばきを受けることが警告されています。

今我々が見たいのは、この忠実な賢い管理者のことです。この管理者はちゃんと主人が帰って来るまで自分に託されたその働きを忠実にこなしています。そうすると44節に「主人は彼に自分の全財産を任せるようになります。」、つまり忠実に主に従い続けたクリスチャンたちにはそれにふさわしい報いがあるということです。我々は御国に招かれた時に、その人にふさわしいそこでの責任が与えられます。どんな働きをするかということ、それは今の私たちの地上での歩みにかかっているのです。あなたが忠実であれば、神はそれにふさわしい働きを与えてくださる。だから私たちは死に勝利した者として、この新しい日を大切に生きるだけではない。この新しい日、神様が私たちに望んでおられることを忠実に果たしていくことです。そのことを神は我々に望んでおられる。

まとめ

クリスチャンは、「死」から解放され、そして救いが与えられました。なぜなら「罪」の問題が解決したからです。救いにあずかったクリスチャンたちにとって「死」とは罪のからだから完全に解放される時です。解放され、主イエスによって約束された所へ導かれるという祝福の始まりです。主の御顔を拝し、この方とともにこの方を賛美しながら、拝しながら我々は永遠を過ごすわけです。その約束はもうちゃんといっている。でも今我々はまだ天に召されていないのです。まだこの地上に置かれています。それはその日が来るまで、私たちにはなすべき務めがあるからです。神は目的を持ってあなたや私にきょうを与えてくださっている。この日を我々は地上で過ごすようにと神は機会を下さっている。神が私たちに望んでおられるのは、神の救いを知らない者たちにこの神のすばらしい救いをしっかりと伝えることです。私たちの創造主は我々をこんなにも愛して、こんなすばらしい救いを大きな犠牲を持って備えてくださった。この福音を伝え続けていくためにです。救いのすばらしさを、また救い主のすばらしさを世の人々に示しながら生きていく、それが私たちがこの地上に置かれている目的です。

パウロはそんなふうにして生きました。ですから彼はこう言っています。「ですから、私の愛する兄弟たちよ。堅く立って、動かされることなく、いつも主のわざに励みなさい。あなたがたは自分たちの労苦が、主にあつてむだでないことを知っているのですから。」(Iコリント15:58)、今私たちは与えられたこの日、しっかり主のために生きるのです。主の栄光のために生きるのです。みことばを学んだらそのみことばが教えてくれた真理に従って生きていこうとするのです。そのための助けは備えられている。こうしてみことばに従うことによって神の栄光が現されていくのです。その生き方こそ神が私たちに望んでおられる生き方です。そしてそのような生き方は決してむだな生き方ではないと。あなたが主の前に立つ時にそのことが明らかになると。神があなたを祝してくださると。神が私たちのような者に対して祝福を下さると。よくやったと褒めてくださる。でも主のために一生懸命仕えることができるのは、この地上においてだけです。時間をむだに過ごしていませんか？ただ何となく日曜日にやって来て、ただ何となく帰っていくような信仰者になっていませんか？あなたが神様によっていただいた賜物を使って一生懸命主のために教会で仕えていますか？私たちのこの地上での生涯というのは神への感謝を表す生涯です。神の恵みを感謝する者としてそれにこたえる生涯です。あなたは喜んで神のために犠牲を払っていますか？あなたは喜んで神のために時間を取ろうとしていますか？神のためだったら喜んで何でも捨てても従おうとしていますか？あなたは時間の余った時にだけ神様に仕えようとしていませんか？思い出してください、イエス様の十字架を。思い出してください、イエス様の犠牲を。それにあなたがどうこたえていくのか、それがこの日を与えてくださった神に対する私たちの責任です。

ジョン・ヘンリー・イェイツ、最初に聖歌514番を作詞した人物の話をしました。この人は1878年(明治11年)2月、たった1週間の間に愛する妻と二人の息子をジフテリアで亡くしているのです。しかし彼は神の約束を信じ続ける信仰、敵を打ち負かす勝利を我々に与えてくださる主イエスへの信仰の生きた証をなし続けていくのです。このような悲しみを通った彼が書いた詞が今最初に皆さんに紹介した歌詞でした。「信仰は勝利、信仰は勝利、信仰持て、世と悪魔に勝たん」。この詞を書いて9年後、1900年9月5日に彼は召されます。彼の墓石にはこう記されています。「信仰は勝利、世に対する勝利、輝かしい勝利」と。彼はその詞を書いただけではない。彼は信仰者として、勝利者としてそのように生きたのです。それが神様があなたや私に求めておられる生き方です。皆さん、そんなふう生きておられますか？神の助けをいただきながら、きょうからそのように歩み始めることです。勝利者として生きることです。「死」に勝利した者として生きること、それがこの祝福をいただいた私たちが祝福を下さった神様に対してできることです。どうかそのように歩んで神のすばらしさを証ししていきましょう。